夏休み。打ち上げ花火が響く夜空の下で死体を発見した。息はしていた。でも、死体だった。出来損ないの人形みてぇな死体は大の字になりながら花火を見上げていた。

なぜ、花火大会当日に草の中に眠る死体がここにあるのか。答えは簡単だ。劇団員なんてみんな死んでいる。どいつもこいつもクソったれだ。

遠くから生徒たちの声が聞こえる。私はため息をつく。

「笠原せんせー！　こっちこっちー！」

「あぁ」

振り返ると、河川敷の向こうに浴衣を着た女子生徒たちが四人、笑顔で手を振っていた。ピンク、黒、水色、紫色、色とりどりの浴衣。鮮やか？　綺麗？　なんて表現していいのか分からないけど、まぁ、輝いてるなとは思った。今だけね。

草が揺れる涼しい風。河川敷の夜空には花火。下には死体。私は立ち上がり、久しぶりに履いたミニスカートについた土を手で払いながら、生徒達の元へ足を向けた。……やっぱ二十五歳でミニスカはまずいかな？

麻里奈たちの目の前で足を止めた。ニコニコ笑いながら一列に並ぶ彼女たちの髪がふわふわ揺れている。なんでわざわざ生徒と一緒に花火を見なきゃいけない訳？　こんな退屈な日を送るぐらいなら股間にブツを突っ込んであんあん喘いでた方がまだマシなんじゃねぇの？

ピンクの浴衣を着た麻里奈がくるっと一回転した。

「どうですか笠原先生、この浴衣」

「どうって何が？」

「いやだから、可愛いでしょ」

「自分で分かってるならいちいち聞くな。褒め言葉が欲しかったら風俗にでも行って来い」

「先生、そろそろクビになるよ」

「なぁ麻里奈」

「はい？」

「お前、ゴミ食った事あるか？」

夏休み。私は顧問を勤めている演劇部の練習をぼんやり眺めていた。体育館のステージで部員たちが必死に演技をしている。脚本と演出は全てオリジナル。琴別高校の演劇部では伝統的にオリジナルの脚本を使う事になっているらしい。

今回の脚本を作ったのは女優になるのが夢だという二年生の岡崎麻里奈という女子生徒で、彼女は主役も担当している。麻里奈は演劇部に所属しているだ

けではなく、札幌の小さな劇団にも所属している。
なかなか熱心で良い事だが、麻里奈が作った脚本は驚くほどに普通だった。
全てにおいて悪くないけど、あまりにも夢が無い脚本。そして、あまりにも未来を感じないお話。
ジャンルは青春で恋愛要素強め。主人公の女子高生はテニス部に所属している二年生で、部長の男子生徒に恋をする。しかし部長はテニス部のエースとして頭角を現し始めた同じく二年生の女子生徒と付き合い始めた。失恋にめげず練習に打ち込み、夏の合宿中に部長へ告白しようと決意する。
そんな三角関係というか片思いをする少女は、恋愛にのめりこむあまりテニスの練習に集中出来なくなっている事に気が付き、自分は果たして恋をしたいのかテニスをしたいのか分からなくなる。その葛藤の果てに、彼女は恋を成就させられるのか。そして目指せ、インターハイ！
これまでに世界中で書かれてきたようなストーリーを、何故彼女がわざわざ書いたのか分からない。いや分かると言えば分かる。こういうお話が好きで、自分の手で書いてみたかったのだろう。それを確かに素晴らしい事だ。
でもね、麻里奈。
それはただの自己満足だ。そんな普通の物語しか想像出来ない人間を欲しがる奴がどこにいる？　そんな普通の人間に普通ではない演技が出来るのか？
やっぱり劇団員はクソったれだ。頭がおかしい。
女優だから脚本家の能力が無くても良い？　そんな事はない。だってそうだろ？　この程度の物語しか想像出来ない奴の発想力に伸びしろはない。もっともっとぶっ飛んだ発想を持った奴だけが役者になれる。演技力と脚本能力は関係無いかもしれないけど、無縁ではない。
麻里奈が趣味で演劇や脚本をやっているなら別にいい。でも彼女はマジで劇団員になる事を目指し、将来は演技で飯を食っていく人生が待っていると信じている。バカだ。
ここに道路があります。この道路は誰でも通れる道です。アンタはそこを歩き続けるのか。自分で新しい道を作らないのか。そうしないと、アンタは道行く人の中に埋もれるだけだ。
部員たちによる演技がひと通り終わって、麻里奈が手を叩いた。
「少し休憩しましょう！　皆良い感じだよ」
部員たちはステージの上であぐらをかいたり、ペットボトルのジュースにがっついたりして寛ぎ始めた。何人かは汗をかいている。今日の札幌は二十八度。クソみたいな暑さではないけど、それでも十分に暑い。

麻里奈がこちらに近づいてきた。黒色のジャージに身をまとった麻里奈は目を輝かせていた。大きな瞳が私をじっと見つめている。
「笠原先生」
「あ？」
私はパイプ椅子の上で足を組み、麻里奈を睨みつけた。
「どうでしたか」
「何が」
「この舞台ですよ。先生に始めて見ませましたよね。どうですか」
「だから何が」
「いやその、ストーリーとか、演技とか」
演劇部には麻里奈含めて十三人の生徒がいて、演技力はどっこいどっこいだった。皆それなりに棒読みで、それなりに声が出ていた。
「あぁ、つまんねぇな」
「……え？」
麻里奈の笑顔が一瞬で崩れ落ちた。私は汗ばんだ髪をかきむしった。
「そのリアクションやめてくれ。お前は世界一の自信家か？」
「何がダメでしたか」
「演技力に関しては今更何も言わない。でもな、麻里奈。ストーリーがダメだ。普通すぎる。可もなく不可もなく。眠くなる。このクソ暑いのにわざわざこんなぬるいストーリーを私の目に見せるんじゃねぇよ」
「そんな……。ひどいよ先生」
「は？　アンタはテストで赤点取って怒られてもそのセリフを吐くのか？」
麻里奈は黙り込んだ。私がここで「そうだね、面白い脚本だよ。演技も悪くない」なんてセリフを言った所で何になる？　バカな子供は勘違いして今のレベルのまま突き進んでしまうだけだ。そしてその内、必ず気がつく。自分は才能も無く無駄に努力をし続けてきた愚か者だと。
「……どこがダメなんですか？」
「今言ったでしょ。ストーリーが普通すぎる。こんな三文芝居見せといてどうですかってなに？　アンタは何も疑問に思わない訳？　このつまんない演技を見てさ」
「でも、私も皆も頑張ってます。その、脚本はダメでも演技だけは……」
「お前は出来の悪い子供の保護者か。世の中は結果が全てだ。結果が伴わない頑張りは頑張りじゃない。てめぇの意味のない努力に世界は興味を持たない。褒めもしない。アンタには愚か者検定の一級をプレゼントするよ」
「……自分では何がどうダメなのか、分かりません」

「今言っただろ。わざわざこんな普通の物語を演じる事に何の意味がある訳？　アンタはただ漠然と好きな文章書いて演技出来ればいいの？　せっかくの高校生活だよ？　たった三年間しかない高校生活だよ？　その思い出溢れる部活動でさ、ただ黙々と普通の事やってていいの？　いや確かに革命的な脚本とかさ、アル・パチーノみたいなすっごい演技するのは大変だよ。口で言うほど簡単じゃない。でも、せめて工夫を凝らしたっていう努力くらいは見せてよね。例え出来上がった脚本とか演技が下手でもさ、少しでも心が動けば十分なんだ」

「先生の言っている事は、良く分かりません」

「残念だ」

「ていうか、お姉ちゃんみたいなこと言うんですね」

「お姉ちゃん？」

「はい。私のお姉ちゃん、劇団員なんです。いつも友達の家とかネットカフェをふらふらしてるんですけどね」

「ふぅん」

「たまに家に帰ってきたと思ったら、笠原先生みたいなこと言うんです。先生、好きなことを一生懸命やっているのに、どうしてお姉ちゃんも先生もそんなに厳しいんですか？」

「話にならねぇな。先生もう帰る」

「え、ちょ。今日は最後まで見てくれるって約束でしたよね」

「約束と校則は破るためにある。私は帰ってゲームするんだ」

麻里奈はぽかんとした顔のまま突っ立っている。私は頭をぼりぼり掻きながら体育館を後にした。

私は友人の佐伯可奈子と一緒に、コンカリーニョで知り合いの舞台を見ていた。劇団員が知り合いにいるといつもチケットを買わされるから困ったもんだ。

ステージの中央にはコタツが置かれ、その周りに座布団が四つ置いてある。主人公のアパートの一室という設定で、主人公とその三人の友人たちが座布団の上に座り、とあるテーマについて議論している。全員女で、みんなだらしなく座りつつも、口調は激しい。

そのテーマとは何か。簡単だ。自分たちの人生はこの先どうなるのか？

四人とも二十五歳という設定で、それぞれ居酒屋バイト、会社員、就職活動中のコンビニ店員、派遣社員。舞台が始まってから酒を飲みながら今後の人生をどうすれば更に良くなるのか、楽しくなるのか語り合う。それだけのお話。

隣に座っている可奈子が私の腕を肘で突っついた。

「おい、夏海」

「なに」
「つまんねぇぞ」
「知ってるよ」
「もしかしてこのまま議論して終わんのか？　そんな訳ねぇよな。チケット代いくらよ？　千五百円だよ」
黒色のワンピース、そして頭に白色のヘアバンドを付けている可奈子は丸顔で目が大きくて童顔で、パッと見女子高生に見えなくもない。そして性格がガサツだっていうのに、もう二十五歳だっていうのに、ティアラなんか頭に乗っけてる。大丈夫かコイツ。
私は小さく伸びをした。私は劇場の雰囲気が嫌いだった。ぐるっと周りを見渡す。一応劇場内はほぼ満席だけど、その内の九割はチケットを買わされた身内と考えて間違いない。
劇団員になりたいと憧れる奴は沢山いる。確かに劇団員は外から見ているだけなら楽しそうだし、輝いて見えるかもしれない。
でも実際はどいつもこいつも、良い年こいて定職に就かず好きな事だけやっているしがないフリーターで、チケットを売りさばくノルマに追われ、いざ舞台を開いても観客の大多数は身内だけ。
これほどまでに虚しい世界があるだろうか？　ある訳ない。
結局、ステージの上の議論は「人生やってらんねぇな」という愚痴に変わっていき、最後は「酒がうまいね」の一言で終わった。地獄の一時間だった。
麻里奈の笑顔を思い出す。彼女は高校を卒業したら大学にも専門学校にも行かず、こういう世界へどっぷりとハマっていくのだろうか。
もしそうだとしたら、私はそれを止めないといけない。教師として。
でも。
生徒の夢を奪う行為は、大人として許される訳がない。
そう、奪っちゃいけない。例え麻里奈が夢に見ているガキだとしても、私があれこれ口出すするべきではない。ただ素直に下手な演技には下手と言い、褒めるべき所は褒めていく。それだけで良い。それが正しいんだ。

学校から出た瞬間、爽やかな青空にうんざりした。汗がどっと噴き出してくる。虫の声やら子供の声やら車の声やら、無駄に暑くて無駄にうるさい。大量の車が国道をガンガン走って行く。
夏休みは憂鬱に過ぎていた。暑くて、うんざりする夏だった。しかも可奈子と、もう一人の友人である千瀬奈々と行く予定だった豊平川の花火大会が雨で流れた。クソっ。

しかも面倒な問題が一つ、私の身に降りかかっている。延期になった花火大会に行く事を麻里奈たちにポロっとこぼしたら、一緒に花火見ようなんて言われてしまった。せっかくのプライベートを生徒と過ごすなんて勘弁してほしい。

でも麻里奈たちに押し切られて私は首を縦に振ってしまった。バカみたい。

私は自販機でポカリを買った。冷たいポカリを一気にごくごく飲む。目の前を背中が曲がった爺さんがノロノロ通りすぎていった。

つまらない演劇に時間を費やしてから数日後の夜中。小腹が減ったから自転車で近くのコンビニへ行った。車は持ってるけどガソリン代がもったいなくて全然使ってない。

自転車で五分くらいで行けるそのコンビニには、中学生くらいの頃から良く利用している。つまり十年以上の期間に渡り、私は同じ道を行き来している事になる。今は実家を離れて一人暮らしをしているからルートは変わったけど、十年以上も同じ景色の中に溶け込み、同じコンビニで同じような物を買ってる自分が、とてもつまらない人間に思えてくる。

コンビニで缶コーヒーと菓子パンを二つ買って外に出た。アホみたいに冷房が効いて涼しかった店内とは全く違う、夜の中途半端に涼しい風を肌に感じた。

私は灰皿の前に立ってタバコを咥えて、缶コーヒーを一口飲んだ。目をぎゅっと瞑ってまた開く。一瞬で膨大な量の思い出が溢れかえってくる。

可奈子はもちろん、色々な友達とこのコンビニへ足を向けた。中学一年生の頃、仲良くなったばかりの友達と肉まんを一つだけ買って、今ここに立っている灰皿の横で食べた記憶がある。あの来の名前は優香と言った。彼女は今、大阪の化粧品メーカーで働いている。

肉まんを半分こして食べていたた友達は、札幌を離れて遠い土地で社会人として人生を過ごしている。でも私はどうだ？　肉まんを食べていた時と変わらず、今も灰皿の横でほんやり突っ立ってタバコ吹かしてる。彼女は本州の土地、新しい土地を目に焼き付けている。私は違う。同じ風の匂いと同じ景色を繰り返し上乗せしていくだけ。画用紙の真ん中、同じ場所に同じ色を塗りたくる。画用紙はいつまで経っても、中央以外は真っ白のままだ。

新しい思い出もなく、ただ過去の思い出をひたすら頭の中でリピートするだけ。そんな人生に価値があるのだろうか。自分だけ取り残されてはいないか？

ほんのり涼しくほんのり草の匂い。この瞬間に夏を感じる。ふと子供の頃を思い出し、爆発的に、心にドスッと響くように夏を感じる。

「……ん」

コンビニから若い女がよろよろ出てきた。青白い顔。細い体。年は二十代後

半。私より年上か？　多分二十七歳くらい。
彼女は灰皿の右側に座り込んだ。私は左側に立っているから、灰皿を挟んで隣り合う格好になる。
彼女はコンビニの袋からおにぎりを一つ取り出した。こいつの顔には見覚えがある。この前見た舞台に出ていた奴だ。女は死んだ魚のような目をしながら前を見つめ、ちびちびとおにぎりを食べている。
「……なぁ」
女はビックリしたように顔を上げた。あまり美人ではなく、化粧気もない。
「アンタ、この前コンカリーニョでさ、舞台やってただろ」
「……どちら様？」
「笠原夏海。お前は？」
「……岡崎香里奈」
おもいっきりタバコの煙にむせた。嫌な予感がしてたんだ。岡崎麻里奈との会話を思い出す。劇団員の姉はふらふら友達の家やネットカフェを渡り歩きながら生活していると。
「あの、大丈夫ですか？」
私は何度も咳をして呼吸を整えた。
「大丈夫。……えーと。岡崎さん？　ここで何してんの」
「晩御飯」
「へぇ。ずいぶんシケた晩飯だね」
「貧乏なので」
「だろうね」
「うちの劇団のファンですか？　私の事知ってるみたいですけど」
誰がお前んとこみてぇな劇団のファンになるかよ。アホか。
劇団員。金無し。居候。放浪。そして。
おにぎりをモソモソと食る人生。私にはおにぎりがゴミに見えた。ゴミを食う人生をコイツは自ら選んだのだ。
私はタバコを灰皿に放り投げ、缶コーヒーを飲み干してゴミ箱に突っ込んだ。彼女にはそれ以上声をかけず自転車に跨がり走りだす。子供の頃と変わらない夏の中で、私は麻里奈の顔を思い出す。
麻里奈はどこまでマジな気持ちで演技をやれているのだろうか。多分、少なくとも、彼女はこのままだとお遊びの趣味で演技を終えるだろう。そしてゴミを食う。
麻里奈の何が問題なのか。やる気はともかく、根本的な問題は他にある。
才能の問題だ。

花火大会当日。打ち上げ開始まであと五分を切った頃、私と可奈子は河川敷に横たわる岡崎香里奈を見つけた。彼女の顔は真っ白で、多分まぁ熱中症で倒れたんだろうなって思った。

「どうする、コイツ」

とか言いながら、可奈子が座り込んでポーチからペットボトルを取り出した。

「おい、アンタ。喋れるか。これ飲めよ」

可奈子が岡崎香里奈の頬を人差し指で突っついた。小さな声が漏れたけど、何を言っているのか良くわからない。私は呟いた。

「一人なのかな」

可奈子が「はぁ？」と声を出した。

「一人で花火大会に来るドMなんて聞いた事ないよ」

「でも、誰もいないよ」

岡崎香里奈のお腹がぐぅっと鳴った。どうやら空腹と熱中症で倒れたらしい。呆れたもんだ。

彼女のスカートのポケットからスマホが覗いているのに気がついた。麻里奈の連絡先は知らないけど、こいつのスマホになら登録されているだろう。

辺りを見回す。人混みの中に麻里奈は見つけられない。空は藍色から黒色に近づきつつある。もう少しで花火が打ち上げられる。高揚感で満たされる夏の蒸し暑い夜。私は汗を流しながらスマホを手に取った。女三人組が心配そうに私達を眺めている。

スマホの電源ボタンを押した。ロックは無し。画面をスワイプさせると、てっきりトップ画面が表示されるかと思いきやメールの受信ボックスが表示された。

受信メールはたった一行。

『ごめんね。やっぱり今日、一緒に花火行けなくなった』

背後から聞き覚えのある声が耳に響いた。

「笠原先生！」

可奈子が顔をしかめる。

「……お前の生徒？」

「あぁ」

「ねぇ、コイツどうする？　マジでさ」

背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

かさはらせんせー！

私は小さく、本当に小さく、笑った。

お前ゴミ食った事あるか？　その質問に麻里奈は首をかしげた。
「なんですかいきなり。ゴミ？」
そしてやっと、麻里奈が私の背後にいる死体に気がついた。岡崎香里奈はようやく意識がハッキリしてきたのか、上半身だけ起こして頭をぼりぼり掻いている。そして可奈子が置きっぱなしにしていた水を引っ掴んで一気飲みした。
「あれ、あの倒れてる人……？」
ドーンドーン！　花火の豪快な音と無邪気な歓声の中、麻里奈が走りだした。そして姉の顔を見下ろす。香里奈の周りには数人の人間が集まって何や騒いでいるけど、大多数の人たちは無関心だった。無心に花火を見上げている。
私は後ろから麻里奈の肩に手を置いた。
「お前、ゴミ食った事あるか？」
一瞬だけ、確かに見えた。
麻里奈は唇を吊り上げて笑っていた。
花火の音が耳に響く。藍色の夜空。垂れる汗。高揚感に包まれた河川敷。キラキラ光る透明の川。すぐそこにそびえ立つビル群。風はぬるかった。
麻里奈は振り返った。オレンジ色の花火が打ち上がり、彼女の顔が光って見えた。麻里奈の顔は汗でぬめっていた。麻里奈はしばらく無表情だったけど、また唇を吊り上げた。
「お姉ちゃん、一緒に花火行く人居なかったんだってさ。なんでだろうね」
「麻里奈」
「はい？」
「この前見た舞台に、岡崎香里奈は出ていなかった。いやもう少し具体的に言うなら、岡崎香里奈は、そうだね」
ドーン！　ひときわ大きな花火が連続して打ち上げられた。可奈子が脳天気に「おー」と声を出す。良い夏だ。そう、良い夏だった。私が麻里奈の夏を崩す訳にはいかないだろう。
私は、二十五歳だ。残念ながらね。
「……いや、なんでもない」
麻里奈はため息をつき、姉に手を伸ばした。
私は目を瞑り、花火の音と歓声だけを耳に染み込ませた。
岡崎香里奈は、そうだね。黒子だったよ。
そう、あのクソみてぇな舞台ですら、役を与えられない人間だったよ。
麻里奈。アンタの未来が、今ここにあるんだよ。
でも、私はそれを口にしない。